

東京新聞2011年4月8日(夕刊)掲載

『原発震災』は想定内

—ストロンチウム90測定値公表を急げ—

明石昇二郎

ヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマ——。

このたびの原発事故によって私たち日本人が受けた衝撃は、ヒロシマとナガサキに原子爆弾を投下された時のものに匹敵するほどだろう。ただ、三発目の「原発」は、日本人自らの手で自国に落とす「自爆」のようなものだった。大震災と原発の重大事故が同時に発生する破局的災害「原発震災」の危険は、少なくとも一〇年以上前から警告され続けてきたからだ。しかしその警告は無視され、実際の対策に活かされることのないまま、現実の話となってしまう。

*

これまでに日本で起きた原子力災害の取材では、早い時期に現場入りをし、取材が長期に及びそうな時は現地に「前線基地」を構え、取材をしてきた。

だが、今回の「原発震災」事故では、そうはいかなかった。事前取材の結果、現地に行っても原発事故に関する情報がほとんど得られないことが判明したからだ。

驚くべきことに、最も事故の情報が必要とされる原発直近の被災者たちは、何も教えられていなかった。事故がどれだけ深刻であり、なぜ避難の必要があった、いつ頃家に戻れそうなのかさえ、何も伝えられていなかった。地震で傷つき、修繕の必要がある住み慣れた我が家から、着の身着のまま追い立てられるように避難していたのである。そんな現地に筆者が突入取材を敢行しても、時々刻々と移り変わる原発事故の詳しい情報は全く得られず、最悪の場合、自らも「被災者」となる恐れさえあった。

これが現実の「原発震災」なのか——。さんざん原発事故シミュレーションをしてきた身でありながら、身震いした。

*

現時点で気になるのは、フクシマから放出され続けている放射性物質で、放射性ヨウ素

やセシウム、プルトニウムによる汚染のことは報道されるようになったものの、被曝した人の骨にたまるやつかいな「ストロンチウム90」の情報が全く公表されていないことだ。それに加えて、ウランのデータも明らかにされていない。

特にこのストロンチウム90は、骨の中にあるカルシウムと置き換わって体内に蓄積し、強い放射線(ベータ線)を長期間出し続ける。大変危険なこの放射性物質の半減期は約88年。フクシマからこれが放出され、環境内に拡散しつづけると見てまず間違いない。ストロンチウム90の測定とその結果の公表は急務である。

実際に事故が起きてみると、原発の立地市町村に支払われる「電源三法交付金」とは文字通りの危険手当であり、補償の前払いだったことを思い知らされる。それと引き換えに、大熊町や双葉町、浪江町、富岡町、楡葉町などの町民たちが失ったものはあまりにも大きすぎる。しかも浪江町に至っては、地元の強力な反対運動により、東北電力の原発建設計画を頓挫させていた地域だった。

果たして町民のいなくなった町にも、電源三法交付金は支払われ続けるのだろうか——。ふと、そんなことを考えた。町役場までが総出で避難してしまうことなど、それぞれ電源三法が全く想定していない事態だ。どうなるにせよ、相当な混乱が予想される。

福島第一原発は、もう発電所としては全く使い物にならないほど破壊された。その持ち主である東京電力もまた、事故によって天文学的負債を抱え、会社としての存続さえ危ぶまれている。

事故を終息させるための決死の作業に最初に着手したのは、東京電力でもなく国の原子力安全・保安院でもなく、自衛隊と消防と警察だった。東京電力の本店では、事故の最中に原発所員の総退避を国に懇願していたという事実も忘れてはならない。今や原発の存在自体が日本社会の一大リスクとなった。

「もう『被曝』も『強制移住』も『計画停電』もいらない」

原発を拒否する理由は、もはやこれで十分だ。ただか電気のために原発を選択し続け

るのなら、これらのリスクを甘受する必要が
ある。今、声を挙げなければ、日本が地震国
であり津波国である限り、「原発震災」は何度
でも繰り返される。

配信元：ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇二郎、ルポルタージュ
研究所

URL : <http://www.rupoken.jp/>